

市長室から



宇城市長 阿曾田 清

真の外交は 市民外交にあり

8月28日、台湾の「鳥と水の舞踏団」の公演がウイニングまつばで行われました。

障害者による公演で、会場あふれんばかりの参加者があり、見る人に感動を与え、大喝采（かつさい）のうちに幕を閉じました。

この公演の橋渡しをしていたのは、徳永雄一さんと清永真二さん。お二人のご努力により、宇城市と台湾の人とのかわり合いが持てたことは意義深いことだと思いました。

また、8月27日には、チュニジア共和国のサラ ハンナシ大使にお会いしました。そのきっかけは、宇土高出身の澤光子さん（東京在住）から「チュニジアは昔の日本と良く似ていて、

自然が残っている。日本の農業技術を生かしてチュニジアへ貢献し、ふるさとの思いをチュニジアの人々に伝えたい」と要請があったためです。そして、日本からの技術・人材派遣や研修生の受け入れなど語り合いました。

宇城市では中国や韓国、インドネシア、フィリピンなど、さまざまな市民外交が盛んに行われています。これはとても素晴らしいことです。具体的な内容は完全には把握できておりませんが、いずれ調査していきたいと思っています。

国家間の外交のみならず、市民（地域）間の外交を進めて行くことこそ、真の外交と言えると思っています。

今年度より

係長昇任試験を実施

行政需要の多様化、高度化に伴い、市職員にもこれまで以上にさまざまな能力が求められており、そのポスト（役職）に適した人材をいかに選抜していくか重要なテーマとなつています。

現在、合併による合理化のため職員数を5年間で20%の削減

を計画しております。そのため、新規採用を控えているところであり、若手職員が少ない町、中堅職員が少ない町、または管理職クラスが旧町・年齢ごとに偏りがみられ、旧町間のバランスをとることが困難な状況であります。

そのため、若くて意欲を持った職員の昇任の機会が狭まる傾向にあり、このままでは若手職員の意欲低下につながりかねません。広域交流も必要ではありませんが、まずは女性職員や若手職員にも昇任の機会を平等に与えることにより、組織を活性化させ職員のモラルの向上を図っていきます。

適材適所の人材登用、新進気鋭の職員を登用することは時代のニーズであります。年功序列の体制を尊重しながらも、能力重視の体制を作っていくことが大切ではないでしょうか？

今回は、まず係長級の昇任試験を実施することにしました。

※11月の市長談話室は2日（金）の予定です。参加ご希望の方は、総合政策課（☎32-1803）へ10月19日（金）までにお申し込みください。

市民レポーターの目

未来に残そう、豊かな心と自然



瑞穂 その

5月のある日、豊野町の鑑ヶ池を通るとカラフルなカヌーが目にとまり、早速、池のそばまで下りてみました。そこには、目を輝かせ、真剣に話を聞いている子どもたちの姿がありました。話をしておられるのは、町おこしグループ「ゆめ、豊野塾！」の事務局、桑島弘行さん（53歳）でした。

説明が終わると、子どもたちは初めはこわごわ、進む方向もままならない様子。しかし、5分もたたないうちに自由にオールを操りはじめ、たちまち池は色とりどりのカヌーの花が咲き乱れました。自然の中での子どもたちの適応の早さに目を見張ってしまいました。「ちょっと乗ってみませんか？」と誘われたものの、私は・・・。

7月、市役所から「市民レポーター」の依頼があり、戸惑いながらも「私流でよければ・・・」ということで引き受けることになりました。数日間、何を取材したらいいか思いあぐねていま



水上を彩る色とりどりのカヌー

したが、その時、頭に浮かんだのが、自然の中でのびのびと活動する子どもたちの姿をやさしく見守っておられた桑島さんの姿。さっそく、仕事場にお邪魔しました。

平成6年、「豊野をどうにかしたい」と村おこしの一環として「どぎゃんなんつとならん会」を立ち上げられたそうです。発足3年後、行政と協力し、浜戸川、小熊野川の一斉清掃作業を行ない、参加者も300人を越え、このことが環境問題に取り組むきっかけになったとのこと。その後、「豊野に住んでいる人たちと自然を大事にしよう」という趣旨で、平成10年に宝くじ財団に申請し、24艇のカヌーを購入。青少年を対象にした「カヌー体験教室」を実施しているとのこと。

「未来に残そう豊かな心と自然」をキャッチフレーズに、名称も「ゆめ、豊野塾！」（伊藤家次会長）に改め、「ジャンボ

門松作り」、「石橋の草刈り奉仕」、「竹炭作り」など、青少年を対象にした活動をされています。会員は20人程ですが、仕事の都合などで参加が少なく、運営は厳しい状況。しかし、未来に引き継ぐ意味でも子どもたち、青少年を対象に頑張っているとのことでした。聞いている私にもその情熱がひしひしと伝わってきました。

今年3月、新たに石窯（いしがま）を造り、ピザやパンを焼く教室も実施され、私も体験の機会を得ました。山の麓の竹林を切り開いて造った炭焼き窯のそばに大きな石釜が造ってありました。

私がお邪魔したときには、窯には火が燃え、いつでも焼ける状態。ピザ用の野菜は地産地消ベーコン、バターも手作り。味も格別でした。猛暑のころではありましたが、そこは一服の涼風が通り、暑さを忘れさせる癒しの空間でした。興味のある人は、ぜひ体験してみてください！



手作りの石窯、味も格別です！

市政モニター

活動の参考のために 宇城市市政モニター施設見学会



小川郷土資料館で説明を受ける市政モニターの皆さん

9月5日、市政モニターによる市内施設見学会が行なわれました。豊野町コミュニティーセンター、農産物処理加工センター、インダストリアル研修館、養護老人ホーム松寿園、戸馳花の学校など全15箇所の施設を1日ばかりで見学。松橋学校給食センターでは試食も行いました。モニターの皆さんは係員の説明を熱心に聞き、市政への理解を深めていました。短い時間でしたが、日常触れることのできない体験ができ、充実した時間を過ごすことができたようです。

今後、市政モニターの皆さんから、今回の施設見学会を含めた、意見、提言、要望などをお聞きし、市政に反映していきます。

東京見聞録

市派遣職員が、今の仕事や市外から見た宇城市の様子を報告します。今月は熊本県市長会東京共同事務所の野村烈さんです。

「もったいない酒」

再開発ラッシュの東京銀座有楽町の周辺。9月1日、オープンしたマロニエゲートというビルの中、銀座ハンズというお店で展示され、数ある展示品の中でも、ひととき異彩を放っていました。

味は抜群なのに、時間が経つとどうしても変色してしまう日本酒。ろ過すると透明になるが、味が落ちるのがもったいない。また、ビンについても、何度も開閉ができるものを使い、ラベ



マル貧（ビン）・もったいないお酒

ルも必要最小限にし、再利用をスムーズにしたとのこと。この商品の前で、多くの人が立ち止まっていました。ところで、近ごろの売れ筋商品、人気店舗、その他流行を考えると「日本人のDNA」を意識した流れが、ひとつのトレンドになっているような気がします。物を大切に長く使う、無駄にしない、使い切るももったいない。例えば、普段はついつい使い捨ての生活をしてしまいがちな人も、おばあちゃんから「もったいなか」と叱られるとたぶんシユンとなってしまう。

日本人は、この「もったいない」に反発できないようなDNAを持っていてるように感じます。この切り口で、まちおこしに取り組むのも案外いいかもしれません。